

## 「行を考察する第十三章」

(二無我を) 詳細に説く>単なる事物の本性が欠如すると示す>事物が本性として有ることを否定する>章の著述を説く> [他派に公認される経証によって、本性が無いことを説く]

何故ならば、そのように直前の章の論法によって尽く分析したならば、諸事物に、我と他と二者が為したことと、無因よりまさしく起こったことは無く、生じさせる他の様相も無い。しかし、無知の眼障によって知恵の目が衰えさせられた者達に、これらの事物は生じる本質とも映る故に、まさしく本性は無いとなったけれど、幻の馬や象等が、それを知らぬ者達（を欺く）ように幼子達を欺くのである。まさしくそれ故に、一切法（現象）の本性が隠されてない御心眼を持たれ、無知の習気を残らず掃い、四つの誤りによって錯誤者となった守護者の無い有情を完全に守護なさる為に、無本性を誤りなく間近に示すことに勤められる、大慈悲を持たれる仏陀、

世尊が、「法（現象）であり、欺くものは偽りである。」と説かれた。  
一切の行は欺く法（現象）である。  
然れば、それらは偽りである。 1

## 経典より

「比丘達よ。欺く主体であるその有為は偽りであるが、涅槃であるその欺かぬ主体は、聖なる真実である。」

や、その如く、

「これは欺く主体である。これは壊れる主体である。」

と説かれた。それ故に、この論法によって「欺き壊れる主体とは、偽りである。」という言葉で世尊如来が説かれ、一切の行も偽りの主体であるので、それ故に、それらの行はまさしく欺く主体であるので、偽りとなる。

そこで、欺く主体とは、誑かし誤りとして映る一旋回する火の輪の如くである。その本性ではないこと自体によって、一切の行は偽りであり、欺く主体である故に、逃げ水の水の如くである。

真実であるものは、欺く主体ではなく、例えば涅槃の如くである。それ故に、示された正理とこの経証より、諸事物は本性が無いと成立した。（何故ならば）般若経より

「一切法（現象）は空であり、本性が無いあり様によってである。」

と現れる故である。

章の著述を説く > [そのような解説は不合理であるという反論を斥ける]

ここに言う。「もしそのように、まさしく欺く主体であることによって、一切の行はまさしく偽りであると示したならば、そう見れば、一切の事物は無いので、まさしく一切の事物を抹消する悪見となるだろう。」

述べよう。今更にも君を欺くものである、欺く主体である諸行が有るというこれは、真実である。

もし、欺く法（現象）であるもの、  
それが偽りであることにおいて、何を欺こうか。

そうではないか？我々が「欺騙を持つものは、偽りである。」と説いた時、それについて何を欺こうか—そこで如何なる事物が無いとなろうか。

もし、幾らかの事物が有るとなれば、それを抹消するので虚無と見る悪見となるが、事物そのものが僅かにも見られていない時、それについて何を欺くとなろうか—何も事物が無くなるとはならないので、この君による論難は正しくない。

「ここでもし、事物が無いという見解をも示さなければ、この経証が何を示すのか？」

述べよう。

世尊がそれを説かれた。  
空性を全く示されたのである。 2

世尊が斯くも示されたことは、事物が無いと示すのではないけれど、ならば何かといえば、空性を全く示すのであり、「本性として生じていないことを完全に明らかにするものである。」という意味である。

斯くも経典より、

「縁より生じたものは生じていない。それに生じる本性は有るのではない。縁に頼るものは空であると説かれた。空性を知るものは不放逸である。」

と説かれた。

章の著述を説く>その経証の意味を他の様相として説くことを否定する> [経証の意味を他に説明する方法を示す]

「ここで経証が、事物は本性として生じていないことを完全に明らかにしたのではない。ならば何かといえば、本性が無いとは、本性はまさしく留まらないことと、まさしく壊れることを示すのである。『これは何からそういうのか』といえば、

諸事物は自性が無い。  
他に変化することが現れる故である。

他に変化するとは、『完全に変化することが見られる故である。』という主旨である。斯くも、もし諸事物に本性が無ければ、その時これらが他に変化することは認識されるとならないが、完全に変化することは認識されもする。それ故に、『本性はまさしく留まらないことが、経典の意味であると知りたまえ。』と示されたとなる。これ故にも、それはその如くであり、何故ならば、

事物は自性が無い。  
何故ならば、諸事物は空性である故に。 3

このように、事物であり自性が無いものは、有るのではなく、「諸事物の法（性質）は空性である」とは、主張するものである。有るのではない石女の子に、その蒙古斑そのものが不合理である。従って、主体が無いのでそれに依拠した法（性質）も不合理である故に、諸事物は本性が有るのである。

他にも、

もし、自性が無ければ、  
他に変化するものは、何のものであるか。

もし、諸事物の本性が無ければ、完全に変化するという性相を持つ、他に変化するものは、何のものであるとなろうか。」とのたまう。

そのような解説は不合理であるという反論を斥ける>そのように説く理由を否定する>他に変化するものが本性として有る理由を否定する> [本性と他に変化することの二つは矛盾することによって否定する]

これに述べよう。そのように尽く考察したとしても、

もし、自性が有るならば、  
如何様であれば、他に変化しようか。 4

ここで、「法（現象）であり、ある事物において間違いの無いものがその本性」といわれる。（何故ならば）他によって否定される対象として無い故である。そこで、間違いのない火の熱を、世間では「本性」と述べるが、熱そのものを水に認めたならば、他の縁（条件）より起こった故に、本性ではない。そのように本性とは、間違いなくそうなるものでなければならぬ時、間違いが無いので他に変化することは無く、火は冷たくなるものではない。その如く、諸事物にも本性を承認するならば、他に変化すること自体が無くなるけれど、それらは他にまさしく変化すると認められるのでもあり、それ故に本性は有るのではない。

他に変化するものが本性として有る理由を否定する＞

[他に変化することが本性として有ることはあり得ないことによって否定する]

他にも、現れてまさしく本性と共にあるとなるものが他に変化したこのものは、諸事物においてまさしくあり得ない。如何様にあり得ないかを示す為に、

そのものにおいて、他に変化することは無い。  
 他そのものにおいても、有るのではない。  
 何故ならば、若者は老いず、  
 何故ならば、老いた者も老いない。 5

と説かれ、先ず、前の時点に留まる事物そのものが、他に変化することは不合理である。このように、壮齢の時期そのものに留まる若さが、他に変化することは有るのではない。

仮に、他の時点を得たこと自体を、他への変化そのものとするならば、それも不合理である。「他に変化した」とは、「老いた」の異音同義であり、それをもし、若者には（当たると）主張しないけれど、他である老のみにおいて変化するならば、それも正しくない。何故ならば、老いたものには再度の老いと、説明の必要性が無い故である。「老いた」において、再度老いと関係して何をしようか。それが無くとも老いそのものが有るので、「老いたものが老いる。」とは正しくない。

「何、まさしく若者が他に変化する。」といえ、それは正しくない。（何故ならば）老いた時期を得ていないものを「若者」と述べる故と、二つの時期も相反する故である。

他にも、

もし、それ自体が他に変化するならば、  
乳そのものが、ヨーグルトになるだろう。

もし、『乳の時点を手放して、ヨーグルトの時点に変化した故に、乳そのものがヨーグルトにはならない。』と思えば。

述べよう。もし、相反するので「乳そのものがヨーグルトになる。」と主張しないならば、

乳より他である何が、  
ヨーグルトという事物であるとなろうか。 6

何？水がヨーグルトという事物に変化するのか？それ故に、「他がヨーグルトという事物に変化する。」というこれは、無関係である。それ故に、そのように他に変化することは無い故に、それが現れたことから諸事物は本性と共に成立すると、何処でなろうか。それ故に、これは正しくない。

斯くも、『聖宝生大乘経』より、

「生じること無く起こること無く、死に移ること無く、老いるとならない法を、人の獅子（仏陀）がそう示され、何百もの有情をそれへ導いた。それに自性は何ものも無い。他でもない。誰にも見つからない。内側でもなく外側にも、見付からないそれらに、守護者が導いた。

善逝が『寂静の行程』と説かれたけれども、『行く』は何も見付かるとならず、その者達は『行く』より解放されると全く説かれた。解放されて多くの有情を解脱せしめた。

無我であると全ての法（現象）を示され、有情の執より世間を尽く解放された。御自身が行くことより解放され、行くことより解放されたので、その如く、彼岸へ去られても超過することも無い。偉大なる仙は、有（輪廻）の彼方へ行かれた。彼方へ去られた何ものも見出さぬとなる。彼方は有るのではなく、此方は無い。『彼方へ去られた。』とも言葉で説かれる。

貴兄が言葉として言うそれも無い。言われたその言葉も有るのではない。何かと言うそれも見付からない。何かを知るそれ（主体）も有るのではない。

誤った考えに執着する影響で、ここにこの全ての衆生は酷く流浪する。

ある者が寂静の法を知る。彼は自然の如来を見る。最高の法である諸々の寂静も良く知り、喜びを見出し、有情を満足させる。煩惱に勝ち、その者は勝者となる。自身が勝者となり、留まることは無い。それ故に、勝者の菩提を良く御存知である仏陀より、衆生は知ることをする。」等を説かれた如くである。

そのように説く理由を否定する>空性が本性として有る理由を否定する> [本義]

『事物は自性が無いことは、有るのではない。諸事物が空性であるとは主張する。それ故に、空性の拠所となった事物の本性は有る。』というそれも正理ではない。」と説かれた。

もし、空でないものが僅かに有るならば、  
空も僅かに有るとなるだろう。  
不空が僅かにも有るのではないなら、  
空も有ると、何処でなろうか。 7

もし、「空性」というものが何か有るならば、その時、その拠所である事物の本性が有るとなるが、そのようではない。

ここで、「空性と無我性は、一切法（現象）の共相である。」と承認しているので、空ではない法（現象）は無い故に、空性でないものは有るのではない。「空でない事物は無く、空性でないものも有るのではない時、対治との相互関係と離れるので、虚空の花の花輪のように、空性も有るのではない。」と確認したまえ。空性が有るのではない時、その拠所である事物も、有るのではない。

空性が本性として有る理由を否定する>それについて、経証との矛盾を斥ける> [経典の意味を説く]

ここで言う。「それが示された故に、無知の大暗黒である非仏教徒の説者に絡めとられた衆生にとって、たった一つの衆生の灯明となった仏陀世尊。世尊が所化達を尽く解脱させる為に示された、非仏教徒の一切の論説と共通ではない、無我を間近に示す途切れることのない炎を持つ方々が現れる、空と無相と無願という三つの解脱門の教えは、如来の善説のみに認められる。しかし君は今、如来の善説を解説する話術によって、その空性を捨て去り始めたのだ。それ故に、善趣と浄脱への道のりを断つ君と論争しても良いのだ。」

述べよう。嗚呼、何ということだ！空に向かうように非常に誤って、涅槃の都へと行く寂静な真っ直ぐな道を捨て去り、事物に頭かに執する蛇に巻き付か

れた輪廻の荒野へ行く道を、まさしく解脱の都へ行くものであると依拠する君は、聖者方によって叱責される対象でありながら、顕かな傲慢の思い込みによって捉えられたことに操られ、まさしく彼等を咎める者である。おい！煩惱の病を余さず治癒される偉大なる医師の王は、

勝者方の空性は、  
 全ての見解より出離すると説かれた。  
 空性を見解とする者達は、  
 成就しようがないと説かれた。 8

のではないか？

ここで空性とは、一切の見解の、一切の思い込みから出離する—止滅するものであるが、見解となったものが止滅するだけのことは、事物でもない。

その空性に対しても事物であると思ひ込む者達に対して、我々は語らない。それ故に、我々の間近に示したことより、全ての分別が止滅して解脱となることが、何処に有ろうか。

このように、ある者へ「君に、商品は何も与えない。」と言って、「おい！俺に『何も無い』というまさしくその商品をくれ。」と言り返したならば、その者が商品はないと納得するように、如何なる方法でできようか。その如く、空性についても事物であると思ひ込む者達の、それを事物であるとする思い込みを、如何なる方法で否定しようか。

それ故に、偉大なる医師に対しても過失を想うことが有る故に、最高の治療者であられる偉大なる医師である如来方によって、それらはまさしく手の打ちようが無いのである。

それについて、経証との矛盾を斥ける＞ [それを説かれた根拠を示す]

斯くも『聖宝積経』より、

「空性であるものが諸法（現象）を空虚にはせず、諸法（現象）そのものが空であり、無相であるものが諸法（現象）は様相が無いとはせず、諸法（現象）そのものが無相であり、無願であるものが諸法（現象）を無願とはせず、諸法（現象）そのものが無願であると、そのように妙観（それぞれに考察）することは、迦葉よ。『諸法（現象）を正しく妙観する中道』という。

迦葉よ。空性であると認識することで空性を考える者達を、私は『この善説より衰え、酷く衰える』と説いた。

迦葉よ。須弥山ほどの（堅固な）プトガラであるという見解に留まる

者は易しいが、顕かな傲慢を持つ、空性（を実在）であるという見解は、そのようなものではない。それは何故かといえば、迦葉よ。一切の見解となったものより抜け出すのが空性であるが、迦葉よ。空性のみであるとする見解は、〈治しようがない。〉と私は説いた。

迦葉よ、これを見よ。例えば、病人が一人いるが、医師がその者に薬を投与したことで、その薬によって彼の全ての病が掻き乱され、薬が胃に入ることで自体が起こらなければ、迦葉よ、これをどう思う？その人はその病から解放されるだろうか？』

（迦葉が）申し上げた。『世尊よ。そうはならないでしょう。その薬によって全ての病が掻き乱され、薬が胃に届くことで自体が起こっていないければ、その人の疾病は非常に重篤となるでしょう。』

世尊がお言葉を賜れた。『迦葉よ。その如く、見解となった一切のものより抜け出すのは空性のみであるけれど、迦葉よ。〈空性のみであると見解する者は、治しようがない。〉と、私は説いた。』

と説かれた如くである。

事物が本性として有ることを否定する＞ [章の名を示す]

阿闍梨月称の御口より綴られた頭句より、「行（作用）を考察する」という第十三章の解説である。